

新九郎通信



発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

今年もたっぷり紫蘇を入れた自家製紫蘇ジュースができた。美しい色と酸味の効いたジュースは、夏バテ防止に最高だ。毎日畑をやっている方から頂く夏野菜も、丹精された方のパワーと一緒に頂くようでは有難い。

この夏も小田原は、熱い！銀座通り 5 画廊同時開催の「街なみ再発見！展」も、連日多くのアートファンで賑わった。清閑亭の現代美術展も、実に見応えある展示で楽しめた。ケヤキでは連日の音楽コンサートに、多くの方が足を運んでいる。松永記念館ではいよいよ 4 日から井上三綱展が始まる。子供向けのアートワークショップも盛んだ。お堀端を彩る提灯祭りは、暑さを吹き飛ばす昼の神輿と、夕涼みしながら観る小田原提灯の美しさに、「小田原に住んでよかった」と実感した夏祭りだった。4 日には、2 年ぶり酒匂川花火大会が復活する。

心の曇るいじめのニュースを聞くたびに、夏休み中の子供たちに、楽しい夏の思い出をいっぱい作ってほしいと願う。

新九郎 8月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

	会 期 展覧会名	見どころ
夏休みこどもフェスティバル	8/3 (金) ポプラ社 8/6 (月) 大日本絵画	ひこうき&グライダー作り しかけ絵本・カード作り方教室
	8/8 (水) ~ 13 (月) 三写三様展	祖父江典子・水出和明・村中淳花・風景・人物 etc 写真展
小田原市・小田原市教育委員会後援	8/15 (水) 8月15日を考える会 2012年の集い「被爆・被曝」	14~15:30 講演：上原公子氏 (元国立市長・脱原発首長会議事務局長) [被爆から人間復活の未来のために] 資料代 300 円
	8/18 (土) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500 円
	8/19 (日) ウクレレのタベ	長谷川マコトの軽妙な会話と素晴らしいウクレレをお楽しみください。
	8/29 (水) ~ 9/3 (月) 現代版画 2012	元永定正最後の版画 草間弥生・豊嘔・横尾忠則 宮迫千鶴・四谷シモン 合田佐和子・斉藤義重他

会期・展覧会名	会場
8/8(水)~13(月) 第 20 回県西の作家達展	アオキ画廊 0465-22-0825
8/16(木)~20(月) 第 32 回ハッスル会美術展	アオキ画廊 0465-22-0825
8/8(水)~13(月) 第 92 回西ゆり会美術展	飛鳥画廊 0465-24-2411
8/15(水)~20(月) K・M 会展	飛鳥画廊 0465-24-2411
8/29(水)~9/3(月) 澤地弘・道子 二人展	飛鳥画廊 0465-24-2411
8/4(土)~9/17(月・祝) 井上三綱・入生田の阿礼から・	松永記念館 有料 500 円 0465-22-3635
8/22(水)~27(土) 根津太治個展	ぎやらりー ぜん 0463-83-4031
8/29(水)~9/8(土) 山口敏郎 記憶の種 2012	ぎやらりー ぜん 0463-83-4031
8/20(月)~28(火) 田陽佳子仕事展	えすばすミラボオ 03-6228-1884 神楽坂
8/2(木)~31(金)水・第 4 木休 白石花織写真展	ナラヤカフェギャラリー 0460-82-1259
8/18(土)~9/2(日) 山口敏郎 未来の記憶	すどう美術館 0465-36-0740
8/16(木)~9/30(日) Art Now in ストレイシーブカフェ	ダイナシティウエスト 4F

小田原の街なみ再発見！ 国府津・昭和レトロの街なみ 5 暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 加藤恭夫



「あの建物はね、昔は郵便局でしたよ。」向い側の舗道でスケッチをしていると、お年寄りが懐かしそうに教えてくれた。小田原の中心だったのだろうかと思える程、立派な建物だ。石造りか、煉瓦作りだろう。「2 階は銀行だったようですよ。」話が続く。自分の街のスケッチに興味深げに見ながらもどこかうれしそうだ。

大正末にできて昭和、平成と生きてきた建物。今は民家になっているが存在感があり、いい雰囲気を出している。後ろには東海道線をはさんで国府津の山が見える。そして、ここにも木造の蔵。国府津は蔵の多い町だ。「おかげで、いいのが描けましたよ。」スケッチを終え、街並みを後にした。

新九郎 真夏のハワイアンライフ

ウクレレバンドがやって来る！！

長谷川マコト&スーパーウクレレバンド



■日時 2012 年 8 月 19 日(日)

開場 17:45 演奏 18:15~20:30

■会場 ギャラリー新九郎 (銀座通り伊勢治書店 3F)

■料金 1,000 円(飲み物・おつまみ付き)

前売りチケットのみ！(当日売りはございません)

チケット取扱：伊勢治書店 (0465-22-1366) 1F ご予約カウンター

090-9847-3919 長谷川

第18回アトリエ訪問 岡部版画工房 松田町寄



松田町寄（やどりき）は、知る人ぞ知る多くの作家が在住する町である。約20年前、町の誘致により多くの作家が移住し、岡部版画工房も、その時寄に建設された。創設者は岡部徳三氏。日本のシルクスクリーン版画の草分けである。1964年、秦野にシルクスクリーンの工房を開設して以来、

刷り師として作家と共にその先端を切り開いてきた。黎明期にあったアメリカに渡り、アメリカの技術を見よう見まねで学んできた。そんな岡部氏は「43年間で延べ200人の作家、種類にすると1500以上の版画制作を手掛け」た。そんな岡部氏のことを草間彌生は「日本のシルクスクリーンを大衆化するのに最大の貢献をした人」といい、横尾忠則は「一緒に仕事をしていると対決している感じ。鼓舞もされた。こちらの未知の力を引き出してくれる人だった」と語っている。饅頭、横尾忠則、草間彌生、オノサト・トシノブ、斉藤義重、前田常作、谷川晃一、元永定正、堀越千秋、中西夏之、吉澤美香、ナム・ジュン・パイク・・・MOMA、ポンピドゥーなど世界の主要な美術館に、ここで創られた作品は数多く収蔵されている。そんなグローバルな仕事をしている工房なのである。

2006年岡部さんの急逝に美術界には大きな激震が走った。彼らの版画作品は岡部さんという作家と一心同体の協働者がいたからこそ生まれたものだったからだ。現在工房では岡部氏の下、共に仕事をしてきた牧嶋さんが、作家活動しながら刷り師の仕事を担当している。私たちがお邪魔した日、合田佐和子の薔薇の新作や村上隆の芸祭出品作家の作品の制作中だった。普段なかなか見ることでできないシルクスクリーンの制作過程や、版画の魅力について、牧嶋さんにお話を伺った。

製版室は工房の一番奥にあった。棚には大小さまざまな版がきっちりと整理され、その仕事の量を物語っていた。アルミの枠に貼られているのは、シルクではなくテトロン生地だ。その版は、作品によって多くのパリエーションがあり、その網目は作品によって使い分けられる。草間彌生の代表作ラメの作品では、ラメの定着のために網目の粗い版を使い、ラメの定着と除去を繰り返す大変困難な制作でこの逸話に、作品を見る楽しみが増えた。



制作手順を伺った。まず、ボジを作るところから始まる。オペーキングで描画するマットフィルムや、デザインナイフでカットするアンバーフィルム。最近ではコンピュータから階調とりをしたクリアフィルムも多い。次に、ボジフィルムを写真のように焼き付ける作業になる。まず、目の細かい網戸のようなスクリーンに感光乳剤をバケツで丁寧に塗る。大型扇風機で風をあて、表面の乳剤が乾いたら画面サイズと同じ対角線距離より紫外線を照射する。紫外線の照射時間によって版の状態も変わる。ボジにより紫外線はブロックされ、感光乳剤は水洗いの現像によってスクリーンが露出して版ができるのだ。この工程を色の数だけ何十版も製版し、刷り重ねて作品が完成する。

「レインボー」で有名な饅頭の作品のために100以上の版を作った作

品もあるという。印刷の際には、色はほんの少し重ねていくのだという。少しの妥協が後になって作品の出来を左右するこの作業は、決して手の抜けない細やかで集中力のいる刷り師の腕がなければできない。紙の位置、紙の伸縮、刷り順、乾燥棚の風の当て方など、天候も考慮した「勘」は、経験がものをいう職人の世界でもある。一枚の紙に作業の過程をすべて記録しながら、この気の遠くなるような果てしない仕事は続くのだ。個展前など何日も何日も休みなく続けているとき、岡部さんに掛けられた言葉が今も忘れられないという。「やってりゃ終わるよ。」と。

それぞれの作家の表現がより広がるように、工房側から作品のアイデアや提案する事もあるそうだ。これは工房が出版制という珍しい形態を主にしており、制作した作品と作家を信じ責任を持ち続ける事である。この工房で制作されたシルクスクリーンが、作家と刷り師の協働作品であるといわれる所が納得できた。



饅頭の原画を見せてもらった。グラデーションはフリーハンドで描かれた鉛筆の線によるもので、インクの指示が描き込まれていた。作品の最終形は、作家も刷り師も想像のままでは出来上がるまではわからない。ここから版を作り、色を作り、刷りと乾燥を繰り返し作品になっていくのだ。しかし、これだけ神経を使っても刷り上がった作品の三分の一は売り物にはならないという。素人には全くわからないようなかすかな刷りのミスをも許さない、厳しいプロの仕事をしているのだ。

デジタル化が進み、デジタルプリントされたものが作品として流通しているが、「版」のない版画の将来には不安を覚えるという。漫然と見る者には見分けのつかないデジタルとアナログの作品の差を、「人間の感性が退化しているから判断できなくなっているのですよ。」と牧嶋さんは言われた。人の手を通して印刷された作品には、手仕事の跡がある。インクの盛り上がり、発色の強さ、デジタルの最終形としてのアナログの味が、確かにしっかりと伝わってくる。我が家の草間彌生コレクションは、銀座のギャラリーで購入したものだが、なんとこの工房で刷られたものだった。今や「世界の草間」となり草間作品は手に入らないほどの人気だが、刷った当時はそんな予想は誰にもつかなかったというからアートは面白い。

シルクスクリーン版画が、美術作品として製作され出したのは1950年代の米国。アンディー・ウォーホルの作品で一躍有名になった。その60年の歴史の中で、今や日本の技術は世界一だと言いつける。丁寧な手仕事の裏には、作家の表現をより拡張させたいという刷り師の熱い思いがあることを、今回初めて知った。作家の名前だけで見ていた作品が、実は原稿以上の表現を目指す刷り師という影武者の存在がいることを、29日から始まる新九郎『現代版画2012』でぜひ見届けてほしい。『刷り師は作品の前に出るものではないが作家を刺激し触発させる仕事をしなくてはだめだ』という岡部イズムを継承する牧嶋さんの確かな仕事を、作品を通して感じ取り、一人でも多くの方に楽しんでほしいものだ。「気持ちは常に作家と同等であれ。その気持ちを持ち続けるのは努力と精進、そして絵の解釈度の高さを維持すること」という岡部氏の遺志を継ぐ弟子たちによって、岡部版画工房はこれからも時代に合った制作を発信し続けていくに違いない。[新九郎友の会 木下和子]

※資料 2011九州産業大学美術館特別展図録

「第十回街なみ再発見！展」が好評のうちに幕を閉じた。第十回の節目となる今年は、原点に戻り対象地域は小田原市に、モチーフは街なみ・建物とし、展覧会の性格を打ち出そうという試みであった。

エリア・モチーフが限定されたことにより、作品が例年のように集まるのか懸念されたが、いざ蓋をあけてみると、133名、192点の作品が集まり、スタッフ一同胸をなでおろした。

10年前を振り返ると、1回目は思うように作品が集まらず、頼んで回ったのが、今では懐かしい思い出である。

「銀座通りの全部の画廊を使って展覧会を開催する。」事は、今は故人となられた諸星和男先生が長年望んでいたものだった。銀座商店会の役員会で、「この通りは画廊が集まっているのだからその特長を生かした事業をやつたらいいのではないか」という提案があり、今の展覧会の実現につながっていった。

テーマは、斉藤四郎先生のスケッチ画集を参考にさせて頂いた。失われゆく古い小田原の街なみを惜しんで描いたスケッチには、小田原の街の魅力の再発見があった。このテーマで作品を集め、次代に伝えていく事は、商店会主催の展覧会として相応しく、意義のある企画だと思わせていただいた。

その後、多くの方が参加しやすいように街並みに風景画も加え、エリアも西湘地域2市8町に加え秦野市まで広がった。

展覧会の名称も「西さがみ街なみ・ふる里再発見！展」とし、9回目まで開催した。そして記念すべき十年目の第十回展は、原点に戻っての開催となった次第である。

いつもの常連の方々がお忙しく、今回は出品されなかったのは少し寂しかったが、知人に誘われて出しましたという初出品の方が多くいた事は嬉しいことだった。今年は出品出来なかったが、来年は出してみたいと言う方もいて、展覧会の拡がりを感じられた。これも前回まで実行委員を務めていただいた、絵画・絵手紙・写真のグループや教室の先生方のご協力と積み重ねの結果である。会場では多くの方々に色々とお話を伺ったが、「絵は描かないのですが毎年見るのが大好きです。」という方がたくさんいて、このような多くの方々に支えられての展覧会であることを改めて感じる。出品者の中には、7月は「街なみ展」と年間のスケジュールに入れて出品される方も多し。また特にグループに属していない方には、貴重な発表の場となっているよううだ。生まれ育った自分の街のお馴染みの場所の絵を見て、過ぎし日の思い出にひたたり、懐かしみ、語り合う楽しそうなお客様をみると、本当にいい展覧会だと思える。二十回、三十回と、ずっと続いてほしいと願う。



7月のこと

「第十回街なみ再発見！展」が好評のうちに幕を閉じた。第十回の節目となる今年は、原点に戻り対象地域は小田原市に、モチーフは街なみ・建物とし、展覧会の性格を打ち出そうという試みであった。

エリア・モチーフが限定されたことにより、作品が例年のように集まるのか懸念されたが、いざ蓋をあけてみると、133名、192点の作品が集まり、スタッフ一同胸をなでおろした。

10年前を振り返ると、1回目は思うように作品が集まらず、頼んで回ったのが、今では懐かしい思い出である。

「銀座通りの全部の画廊を使って展覧会を開催する。」事は、今は故人となられた諸星和男先生が長年望んでいたものだった。銀座商店会の役員会で、「この通りは画廊が集まっているのだからその特長を生かした事業をやつたらいいのではないか」という提案があり、今の展覧会の実現につながっていった。

テーマは、斉藤四郎先生のスケッチ画集を参考にさせて頂いた。失われゆく古い小田原の街なみを惜しんで描いたスケッチには、小田原の街の魅力の再発見があった。このテーマで作品を集め、次代に伝えていく事は、商店会主催の展覧会として相応しく、意義のある企画だと思わせていただいた。

その後、多くの方が参加しやすいように街並みに風景画も加え、エリアも西湘地域2市8町に加え秦野市まで広がった。

展覧会の名称も「西さがみ街なみ・ふる里再発見！展」とし、9回目まで開催した。そして記念すべき十年目の第十回展は、原点に戻っての開催となった次第である。

いつもの常連の方々がお忙しく、今回は出品されなかったのは少し寂しかったが、知人に誘われて出しましたという初出品の方が多くいた事は嬉しいことだった。今年は出品出来なかったが、来年は出してみたいと言う方もいて、展覧会の拡がりを感じられた。これも前回まで実行委員を務めていただいた、絵画・絵手紙・写真のグループや教室の先生方のご協力と積み重ねの結果である。会場では多くの方々に色々とお話を伺ったが、「絵は描かないのですが毎年見るのが大好きです。」という方がたくさんいて、このような多くの方々に支えられての展覧会であることを改めて感じる。出品者の中には、7月は「街なみ展」と年間のスケジュールに入れて出品される方も多し。また特にグループに属していない方には、貴重な発表の場となっているよううだ。生まれ育った自分の街のお馴染みの場所の絵を見て、過ぎし日の思い出にひたたり、懐かしみ、語り合う楽しそうなお客様をみると、本当にいい展覧会だと思える。二十回、三十回と、ずっと続いてほしいと願う。